

図書館利用者の文献検索行動に関する調査

山口真也
沖縄国際大学

- 1. 研究の目的：** 2011年度より、情報リテラシーを学ぶ初年次学生向けの必修科目の中で、図書館機能を活用した文献検索方法を指導している。大学生の文献検索行動にはパターン化されたミスも見られ、彼らの行動を解明することは、教育機関における文献検索ガイダンスの問題点・課題を解明することにもつながると考えられる。
- 2. 調査の実施方法：** 2012年10月14日(日)、沖縄国際大学総合文化学部日本文化学科1年生を学籍番号順に2つに分け、1・2時間目(9時～12時10分)と3・4時間目(13時～16時10分)の時間帯にそれぞれ実施した文献検索ガイダンスの中で、開始前と終了後に次の2つの調査を実施した。
 - 開始前:「魔女裁判」「吹抜屋台(ふきぬきやたい)」という2つのテーマを与え、OPAC検索時にどのようなキーワードを指定すればよいか、解答用紙に記してもらおう。
 - 終了後:ガイダンスで取り上げた文献検索手段の事前認知度、文献検索経験の有無について、アンケート形式で確認。回答者数は132名(男性45名、女性87名)、(休学者を除く)回答率は97.8%。
- 3. 調査の結果：**
 - ① キーワードを「魔女__裁判」のように単語単位で区切ることができたのは15.2%、「魔女」に限定したのは28.0%、「魔女狩り」等の同義語を指定したのは6.8%。「魔女__裁判__中世__ヨーロッパ」のようにキーワードがどんどん増えていくケースや、「魔女裁判__資料」「魔女裁判__原因」のように不要なキーワードを追加するケースも見られた(9.1%)。インターネット検索との混合が見られる。
 - ② 検索手段の認知度は、「OPAC」が90.9%、「索引」「目次」は60%前後であったが、「ジャパンナレッジ」「CiNii」、新聞記事DB等の電子資料は2～4%と低調。
 - ③ 検索経験の有無については、「OPACで見つけた文献の隣の文献もチェック」(72.7%)、「同義語検索」(70.2%)が高い値を示す一方、「上位・下位分類もチェック」(9.1・4.1%)、「レファレンスサービスを利用」(3.3%)、「リクエストサービスを利用」(0%)と低調な項目も見られた。
- 4. 考察・今後の課題：** 利用者の多くは図書館を活用した学習経験があるが、文献検索スキルは十分には備えていない。また、図書館は、利用者にとって、所蔵されている文献を探す・借りる場所であり、未所蔵文献を要求したり、アドバイスを受けるような、学習活動をサポートする心強いパートナーとしての認識は乏しい。その背後には、一定のスキルを習得し、多様な文献を検索しなければならない切実なニーズが利用者側にはないということ、具体的には、評価基準の不明確さや課題設定の不十分さなど、教育活動そのものの問題があると考えられる。文献ガイダンスでの学習を具体化・実質化していくためには、FD活動との関わりも含めた検討が必要である。